

Japanese Society for Study of Special Needs Education

日本特別ニーズ教育学会

(SNE学会)

会報 第23号

2010. 3. 30

日本特別ニーズ教育学会第15回大会（山形大会）を振り返って

大会事務局長 三浦光哉（山形大学）

日本特別ニーズ教育学会第15回山形大会は、平成21年10月17日（土）～18日（日）に開催いたしました。

両日は、天候にも恵まれ、全国各地から130人の方が参加してくださいました。厚く御礼申し上げます。内容も盛りだくさんで、それぞれ活発な意見が取り交わされました。その一部をご紹介します。

実践報告は、「ここまで進んできた東北地域の特別支援教育～地域資源や学校の特色を活かした取組～」というテーマで、保育園から特別支援学校まで7つの発表がありました。特に、幼児期や青年期での特別支援教育の取り組みが遅れているとの指摘がありますが、教育委員会やその他の医療・福祉・労働等の連携を図りながら総合的に支援している体制を構築することにより特別支援教育を推進していることが理解されました。

シンポジウムでは、「教育委員会・研究会組織・親の会等の主導による特別支援教育推進の成果と課題」というテーマで、3人のシンポジストが発表されました。鶴岡市における大学と教育委員会による特別支援教育コーディネーター養成研修制度、秋田県における特別支援教育推進体制整備、岐阜県各務原市の特別支援教育推進部会による独自の研修制度、庄内アインシュタインにおける発達障害児へのSST等の活動などについて、これまでの取り組みの成果と課題について報告されました。いずれも全国的には例のない特徴的な取り組みでもあり、今後、先導的な事例として採用される内容の実践でした。

教育講演は、清水貞夫氏による「特別支援学校学習指導要領改訂のポイントと実践」、窪島務氏による「算数障害のアセスメントと指導」の2つを設定しました。清水氏からは、特別支援学校の新学習指導要領のポイントと、それを踏まえての授業活動について講義していただきました。また、窪島氏からは、算数障害研究の動向、脳機能から見た算数障害、算数の指導方法など多岐にわたって紹介していただきました。

研究課題では、「幼稚園、保育園における特別支援教育の現状と課題」と「高校特別支援教育の推進」の2つの発表がありました。両者は教育の入口と出口の問題であり、障害の早期の見極めと早期教育、就労と今後の人生設計など、最重要課題として取り組まなければなりません。その意味では、それぞれの実践が多くの教員に示唆を与える内容でした。

夜の「懇親会」では、当初8人の予約でしたが、最終的に45人の参加がありました。郷土料理や銘酒などに舌鼓ながら、大いに語り合いました。その後、2次会に出かけたグループもあり、山形の夜を満喫していただきました。

2日目に入り、7つの自由研究発表と5つのラウンドテーブルがありました。自由研究では、「歴史・政策」「外国・比較」「発達障害児の教育実践」「早期教育、不登校」「通常学級・特別支援学級・特別支援学校での実践」「支援計画の作成」など多岐に渡る実践が報告されました。

ラウンドテーブルでは、「授業評価」「算数の授業」「学校運営」「生涯教育」「いじめ・非虐待」など、日々の

授業実践での取り組みや現在の学校教育での様々な問題について活発な意見が交換されました。

山形大会では、2年前に「中間発表会」を企画し、また、年度初めに「プレ発表会」を企画して県内の教員等に広く「日本特別ニーズ教育学会」の名を広めて参りました。今回の大会を振り返り、多くの皆様に参加していただいたことに改めて感謝いたします。3人の大学教官とわずかな学部学生だけの運営でしたので、いろいろとご迷惑をおかけいたしましたことをこの場をかりてお詫び申し上げます。

次年度は、「さくらんぼ」から「もも」へバトンタッチです。学会のますますの発展をお祈り申し上げます。



会場前看板



西村學大会実行委員長挨拶



実践報告

ラウンドテーブルの報告 第15回大会では5つのラウンドテーブルがありました。

ラウンドテーブル1 「特別支援教育における授業評価について」

ラウンドテーブル2 「通常学級の算数の授業（2）—現場の実態から見えてくるもの—」

ラウンドテーブル3 「特別支援学級が参画する学校運営—特別支援学級の現状と今後の展望—」

ラウンドテーブル4 「障害の重い人々の生涯教育と専攻科」

ラウンドテーブル5 「発達障害児の不応、いじめ、被虐待の実態と対応」

以下報告を掲載します。

ラウンドテーブル1 「特別支援教育における授業評価について—特別支援学校における学校評価・授業評価を中心に—」

企画者 渡邊 健治（東京学芸大学）

話題提供者 田中 謙（東京学芸大学大学院）

指定討論者 早川 透（京都教育大学附属特別支援学校）

本ラウンドテーブルでは、まず企画者・渡邊健治（東京学芸大学）より近年の一連の教育改革と学校評価についての流れが示され、そのなかで現在の特別支援学校における学校評価・授業評価の現状を踏まえ、今後の学校運営上における学校評価・授業評価の課題を明らかにすることが、ラウンドテーブルの趣意として示された。

話題提供では、田中 謙（東京学芸大学大学院）から学校評価に関する調査報告がなされた。調査結果からは、都内52校のうち回答が得られた43校すべて（100%）で保護者による学校評価が実施されていること、また児童生徒による学校評価も33校（76.7%）で実施されていることが示された。一方で、全児童生徒を対象としている学校は43校中7校（16%）にすぎず、可能な限り全児童生徒による学校評価が実施されるための工夫が必要なこと等が報告された。

討論では、指定討論者・早川 透（京都教育大学附属特別支援学校）から教師は日々教育実践のなかで実態把握などを通じて児童生徒の授業の評価等を受け、改善に努めており、改めて機会を設けて学校評価・授業評価を行うこと

の意義の検討が十分なされていない状況があるのではないかと、という指摘がなされた。

フロアからは、早川の指摘を受け、福祉施設での評価の階層性や事例を示しながら、指摘の検討が今後必要であること等があげられた。また、何を評価対象とするのか、どのような方法で行うのかといった対象や方法の検討の必要性、評価を受け止めるための仕組みづくりの必要性などもあげられ、活発な議論がなされた。

最後に企画者・渡邊から議論を踏まえ、今後さらに学校評価・授業評価の意義やあり方を検討していくことの必要性が示された。(文責：田中謙)

ラウンドテーブル2「通常学級の算数の授業(2)ー現場の実態から見えてくるものー」

企画者 高橋浩平(東京都世田谷区立烏山小学校)

報告者 八島由羽子(東京都町田市立鶴川第四小学校)

横堀みずき(東京都調布市立緑ヶ丘小学校)(※当日文書による報告)

指定討論者 有田八州穂(東京都多摩市立第二小学校)

このラウンドテーブルでは、昨年度に引き続き、場を「通常学級」とおき、通常学級において、特別支援教育の観点から算数の授業について討論した。企画の意図としては、研究指定校や特別支援教育について積極的に行っている学校ではなく、ごく当たり前の学校での実態から考えていきたいということがあった。昨年度報告があった特別支援学級の併設校で特別支援学級も含めて行ってきた算数の研究を教員として体験し、その後異動して違う学校で実践されている先生から報告していただいた。研究で行った3つの足踏み(①できるのに解かせてくれない②できてしまっていることがない③わからないのに教えてくれない)の解消を目指しての自力解決の授業を進める中で「授業の構成を工夫することで、個別指導と全体指導の時間をとることができる」「いろいろな子どもたちがいて、友達の話の聞いたり自分も発表したりして、集団の中で少しずつ育ってきている」という報告がある一方で、「教員経験や考え方の違いがあり、学校全体でなかなか統一したやり方が出来ない」という課題も出された。

議論の出発点の問題意識として以下の6点を挙げて議論を行った。①特別支援教育が「特別なもの」になっているのではないか②通常学級担任の多忙化に拍車がかかっていないか③教員の算数に対する考え方が不十分のまま授業を行っているか④多様な授業形態のメリット・デメリットをどう考えるか⑤「習熟」の問題をどう考えるか⑥小学校時代に基礎的な学力をつける必要性。有田は「通常学級の子どもたちに育むべき数学的な力と特別支援学級の子どもたちに育む必要のある数学的な力とに、程度の違いはあれ、本質的な違いはない」と改めて指摘するとともに、教える側が「簡単に・速く・たった1個のやり方で正解を出せる計算力をつけられたい」のではなく、「計算を通してどういう数学的な力をつけさせたいか」を見通して学ばせていかなければならない。そして「系統発生的に算数を学ぶ」とはどういうことを意識していかなければならない、と指摘した。さらに今の学力低下問題は、「子どもが学ばなくなったのではなく、教える教員の側が、「主体的に授業を考えなくなった結果」ではないか」と指摘した。ただ現場の教員は若手も多く、なかなかそこまでの意識がないということも話題になった。一方で少人数指導等の多様な授業形態は広がっており、少人数にすることで、特別支援がしやすい状況が作れることも議論に上った。

通常学級での特別支援教育を考える際に、やはりそこで行われている授業を改善し、支援の必要な子も含めて学力を保障できる授業にしていけることが問われている。少なくとも支援の必要な子にただ人をつけられたいということではないはずである。2年間にわたって「通常学級の算数の授業」ということに焦点化して議論を行ってきたことは、その具体像を考える上で大変有意義なことであった。参加された皆様に感謝申し上げます。(文責：高橋浩平)

ラウンドテーブル3「特別支援学級が参画する学校運営—特別支援学級の現状と今後の展望—」

企画者・話題提供者 小林 徹（東京都羽村市立羽村第三中学校・東北大学大学院）

話題提供者 加藤由紀（大阪府茨木市立西陵中学校）

齋藤道美（宮城県仙台市立高森中学校）

指定討論者 越野和之（奈良教育大学）

奥住秀之（東京学芸大学）

（参加者 企画側6名 フロア7名 計13名）

話題提供者は3名でいずれも中学校特別支援学級担任である。小林（東京都羽村市立羽村第三中）は交流および共同学習を円滑に進めるために学校全体の時間割作成に携わった経験等を、齋藤（仙台市立高森中）は特支学級が大切にする3つの視点（①個に応じる②生きる力を育てる③進路支援）に関連した自身の学校支援の実践を、加藤（大阪府茨木市立西陵中）は「原級保障」の考え方と対峙しながら取り組んでいる子どもの集団形成を大切にした教育実践を、それぞれ報告した。指定討論者の越野（奈良教育大）はこれらの事例が、特支学級の生徒が学校全体の活動の中で主人公になることを目指した、担任の実践の延長線上に位置づけられることを指摘した。また、日常の配慮等の取り組みによって学校における要支援生徒を許容する力が増したとするなら、それは「通常のニーズに対する通常の支援」の範囲内であり、それでもなお支援を必要とする場合にどのような手立てがあるかを考えることが「特別な支援」であると述べた。また、奥住（東京学芸大）は地域による違い、小・中学校の違い、学校運営への関わり方の違い等、様々な差異を検討する必要性を指摘しながら、その上で特支学級そのものがもつ価値を論議するべきであるという方向を示し、「特別でありながら、特別でない」存在としての特支学級の検討を提起した。その後、フロアからの積極的な発言があり、有意義な論議が展開された。新たな視点を得て、次回大会での論議の継続および深化が期待される。（敬称略）
（文責：小林徹）

ラウンドテーブル4「障害の重い人々の生涯教育と専攻科」

企画者：猪狩恵美子（福岡教育大学）

話題提供：田中良三（愛知県立大学）

小畑耕作（和歌山県立紀北特別支援学校）・本間哲朗（山形県立米沢養護学校）

指定討論：河合隆平（金沢大学）

本ラウンドテーブルでは、まず全国的には関西圏を中心に実践・運動が広がってきた専攻科について、田中氏より経過と到達点が報告され、特に07年9月に行われた滋賀県での保護者ニーズ調査で「50%が存在を知らなかった」が「72%が必要と考えている」状況が明らかにされた。小畑氏より高等部卒業後の進学において「障害・障害種による格差」が顕著、訪問教育等での教育年限延長の要求などの実情と、和歌山で始まった、学校教育ではないが自立支援事業制度を活用したフォレスクールなどの新たな取り組みが報告された。開催地・山形の本間氏からは、東北では2番目に始まった就学猶予・免除者の教育の経過と実践について映像を交えて報告された。「何を今更」という気持ちだったが「この子なりの成長があったと思うと感無量」という保護者の声が紹介された。病院・施設の実践も実践の開始によって変化が見られるという。河合氏からは、不就学問題は権利としての教育がどれだけ根づいたかの根幹。権利の補いではなく一人ひとりの学ぶ姿・人とかかわる姿を通して「青年期」「成人期」をどう創っていくかという、義務制30年後の今日的課題であることが提起された。フロアから、生涯学習と専攻科のつながりの関係、病院訪問での教育年限延長、自閉症児と職業訓練しかない枠の矛盾など重要な意見を受け、本課題をさらに深めていきたいと考える。
（文責：猪狩恵美子）

ラウンドテーブル5 「発達障害児の不応、いじめ・被虐待の実態と対応」

企画者：高橋智（東京学芸大学）、新井英靖（茨城大学）

司会者：相澤雅文（京都教育大学）、田部絢子（成女学園中学・成女
高校/東京学芸大学大学院）

報告者：①新井英靖（茨城大学）「特別支援教育の巡回相談と被虐待児への対応と課題」

②相澤雅文（京都教育大学）「発達相談から見た発達障害児のいじめ・不登校等」

③高橋智（東京学芸大学）「本人調査からみた発達障害児の不応の実態と求める支援」

教育現場において、発達障害児の二次障害を予防する対応の重要性が強く言われている。実態調査研究においても、少しずつ発達障害と不応・いじめ・被虐待等の問題の関連が明らかになってきた。こうした中で、理論的・実践的に発達障害児への対応方法を検討するために、このラウンドテーブルが企画・開催された。

ラウンドテーブルでは、まず、新井が特別支援教育の巡回相談の中で被虐待児への対応を進めていく意義と方法について報告した。ここでは、多様な職種のスタッフが関与する混成チームを組んで相談・支援体制をつくることとともに、学校においては子どもの社会的・情緒的発達の基盤を形成していく取り組みの重要性が指摘された。相澤は、自らの臨床相談をもとに、いじめ・不登校の子どもへの臨床的関わりの方法について報告した。ここでは、発達相談を通して子どもが「ホッ」と一息つける空間を用意し、夢中になれる活動を提供すること、そして、時間をかけて対応することが重要であると報告された。高橋は、発達障害のある本人調査をもとに、学校不応の状態と本人が求める支援について報告があった。そこでは、「クラスメイトとの会話や遊びは合わないので一人であることが多いが、そのことが理解されず変わり者扱いされて辛い思いをしたことがある」などといった意見をもっている発達障害者も多いことが指摘され、支援者が本人の気持ちを確認しながら支援を進めていくことの重要性が指摘された。

こうした報告を受けて、フロアからは、教育現場ではこうした不応や虐待の子どもへの対応に苦労しているところもあるので、こうした視点からのラウンドテーブルはぜひ継続してほしいといった意見がだされた。また、こうした不応・いじめ・被虐待等の問題に対しては、学校の教師だけでなく、家庭においてもどうしてよいかわからず問題が放置されていたり、途方に暮れていたたりする現状があるといった意見もだされた。そのため、教育・学校からこうした問題を抱える子どもとどのように寄り添い、支えていけるのかを検討していくことが大きな課題であるといった意見が出された。

ラウンドテーブルは30人を超える人数が集まり、活発な議論が展開され、継続して議論していく必要性が確認された。なお、今回のラウンドテーブルの報告要旨は、SNEブックレット第4巻として刊行されているので、ブックレットも参照されたい。
(文責：新井英靖)

SNEブックレットのご案内

SNEブックレットNo. 1 特別ニーズ教育と学校づくり

「特別支援教育」から「特別ニーズ教育」への発展を展望して（窪島務）

特別な教育的ニーズを持つ児童を支援する校内支援システム（小野学・篠原吉徳）

特別な教育的ニーズを持つ子どもへの支援方法（新井英靖）

SNEブックレットNo. 2

通常学級での教育実践に通底している特別支援教育の原理（梅原利夫）

通常学級でいじめなかわりを求めている子どもたち（宮本郷子）

最も課題の大きい子どもを集団づくりの柱にする（中川拓也）

SNEブックレットNo. 3 高校特別支援教育を拓く

巻頭言 高校特別支援教育を拓く（高橋智）

1. 高校特別支援教育をめぐる施策の動向（内野智之・田部絢子・高橋智）
2. 京都府北部にある昼間定時制分校の取り組み（谷口藤雄）
3. 定時制高校における特別支援教育の実践（菊池信二）
4. 農業高校における特別支援教育の実践（松宮敬広）
5. 私立高校における特別支援教育の動向（田部絢子）

資料 高校特別支援教育関係文献一覧（内野智之・田部絢子・高橋智）

SNEブックレットNo. 4 発達障害と「不適応・いじめ・被虐待」問題

巻頭言 発達障害と「不適応・いじめ・被虐待」問題（高橋智・新井英靖）

1. 「発達障害と不適応」問題の動向と課題（高橋智・横谷祐輔・田部絢子・石川衣紀）
2. 本人調査からみた発達障害の不適応の実態と求める支援（高橋智・生方歩未・田部絢子）
3. 発達相談からみた発達障害児のいじめ・不登校等（相澤雅文）
4. 特別支援教育の巡回相談と被虐待児の支援（新井英靖）

No.1 およびNo.2は、1冊700円、No.3およびNo.4は、1冊1000円で頒布しています。申し込みは学会事務局までファックスかメールをいただければ、振り込み用紙を同封して冊子をお送りします。

次回研究大会は岡山大学です。

SNE学会第16回研究大会

2010年11月6日（土）・7日（日） 於：岡山大学

皆様の参加をお待ちしています。